

私の一冊

歯科衛生学科 木林美由紀 先生

有吉佐和子著 『悪女について』（新潮社）

この本は、1978年に「週刊朝日」で連載された有吉佐和子の小説で、テレビドラマ化されたり、舞台上で上演されたりしています。2012年には沢尻エリカ主演でドラマ放映されたのが記憶に新しい方もいるのではないのでしょうか？

有吉佐和子は、私の好きな作家の一人で、古典芸能や花柳界の「芝桜」、歴史に題材をとった「華岡青洲の妻」「出雲の阿国」「和宮様御留」、激動の近代を生き抜いた強い女性像を描いた「紀ノ川」「有田川」「日高川」、認知症老人と介護をテーマにとった「恍惚の人」、公害問題を社会に突きつけた「複合汚染」、人間関係の中にコミカルに老いを見つめた「三婆」などの話題作が多くあります。

この「悪女について」はずいぶん昔に読んだ本ですが、いまでも読み終えた時の強烈な印象が忘れられない一冊です。

主人公である「富小路公子」は一度も登場せず、第三者が富小路公子という人物について語るという少し特殊な物語です。女性実業家の富小路公子が突然、謎の死を遂げるところからストーリーが始まります。公子は持ち前の美貌と才能を駆使して、一代で莫大な財を成しましたが、その一方で数々のスキャンダルを起こしたことから、マスコミからは「虚飾の女王」「魔性の女」などと悪評を書きたてられました。物語は、そんな公子と関わった人物 27人のインタビューを綴ったもので、女性の虚実を浮かび上がらせる作品です。それぞれ人物と公子との繋がりがとても複雑で、読んでいても、わかったようでわからない、とても不思議な気持ちになります。しかし、とても面白く引き込まれ一気に読み切った記憶があります。

27人にとって27通りの公子の顔があり、ある人物にとってはどうしようもない悪女であり、別の人物にとっては慈愛に満ちた聖女である公子とは一体誰なのか？最後まで、本当はどんな人物だったのかが明かされることなくページは終わります。結局、公子と関わった人たちが公子をどう受け取ったのか、どのように感じたのかで、悪女に見えたり聖女に見えたりするのでしょう。

公子は、本当は悪女であったのだろうと私は思います。でも、それぞれの人物に対してその人だけの「富小路公子」を真摯に演じていたので、悪い女だけれどもどこか憎みきれない、か

わいい女性ではなかったのかな、と感じています。

一人の人物に対する印象は様々で、どのような人間であるかを一概に言葉で表すのは難しく、こちらの見方や関わり方でイメージが変わってくるものだと考えさせられる一冊です。

ヒューマンサービスである職種を目指される学生諸君、自分が他人にとってどのような人物に映っているのか、どのように受け取られているのか、真剣に考えた事はあるでしょうか？

興味があったら、ぜひ手にとって読んでみてください。